

詩編 5 編の黙想：主は、「避けどころ」、「盾」である主に護られて生きる（2020.4.24 用 MT）

黙想（meditation）とは与えられたものや言葉を思い巡らすこと。瞑想（contemplation）とはそのような言葉からも自由になり、神を体感すること。今日もみ言葉から黙想して、心しずめて一日を始めましょう。呼吸は吸う以上に「はくこと」も大切です。まず、息を吐かなくては新しい空気を吸うことはできません。10分もかかりません。まず、詩編第5編を読んでみましょう。

詩編は、「主よ、わたしの言葉に耳を傾け、つぶやきを聞き分けてください。」「叫ぶ声を聞いてください」「わたしの声を聞いて下さい」「御前に訴え出て」と言葉を重ねています。日本語の「つぶやき」とは、想いや声が神に向かわず、自分の中で堂々巡りをするというニュアンスがありますが、ここで「つぶやき」と翻訳されたヘブライ語「ハギギ」はとは瞑想を意味し、口語訳では、「わたしの嘆き」と翻訳されています。ともかく、主なる神に向かい祈るのです。祈りは、「わたしの言葉」から「わたしの瞑想」へ、そして、「叫び」（シェバ危急、緊急時の叫び）に、そして声（叫びの声）となります（4節では「わたしの声」）。それに対応して、主は、「耳を傾け」、「聞き分け」（口語訳では、「み心を留め」）、「聞いて」（集中して留意すること）くださる。神は言葉にならない呻きも洞察し、聞き分けて下さるのです。

4節で「朝ごとに」が2度繰り返されています。1日を始める朝にまず主なる神に向かって祈る。「御前に訴え出て」（アラクとは燔祭を捧げて、準備を整え、待つことを意味する）。口語訳はそれゆえ、「いけにえを備えて待ち望む」と翻訳しています。ここでは「あなた（主）」に向かって（3, 4節）祈り、仰ぎ望むことが強調されています。もう一つ注目すべきことは「わたしの王」という呼びかけです。この詩がダビデのものかどうかを歴史的に確定できないかも知れませんが、もし、王ダビデであれば、本当にこの世界を支配している王ダビデではなく、「主よ、あなたです」という告白となるのでしょうか。ここでは、理性的・知性的神理解を踏まえて、深い人格的な「わたし」と「あなた」の関係が成立しています。夫や妻、親と子、牧師や信徒の関係以上ですか？

5節の原文には「逆らう者」「悪人」はなく、ただ、邪悪に（生きる）汝、邪悪は神と共に宿らずとあるだけです。悪しき者とは、「誇り高い者」（傲慢）、悪を行う者、偽りを語る者、流血を厭わない者、欺く者ですが（不安に付け込む詐欺師に注意！）、基本的に神に信頼せず、神に祈らない者です。神もそのような者（あるいは悪）の傍にいることを喜ばないと言います。神が「御もとに宿る」「身を寄せる」（口語訳）という恵みの状態を許されないとは恐るべきことです。

8節の「しかしわたしは」によって作者は神との疎遠ではなく、神の宮で共におり、礼拝することを選びます。罪深い者がどうして主なる神の傍らに「身を寄せる」ことができるでしょう。律法を守る義ではなく、「深い慈しみ」（「ヘセド」（恵み、恩寵）は「義」（ツェデク）、「真実」（アーマン）、公正（ミシュパート）と並ぶヘブライ語聖書のキーワード）をいただいて神の家に入ります。「あなたの恩寵によって」（of Your mercy）神殿に入り、「畏れ敬います」（あなたの恐れにおいて礼拝します）（in fear of You）。今日も一日、「まっすぐに主なる神の道を歩めるように。なぜなら、陥れようとする人々が沢山いるのだから。悪しき者の中を歩む信仰者には神が「避けどころ」「守り」「盾」となる。信仰者はこれを喜ぶ。